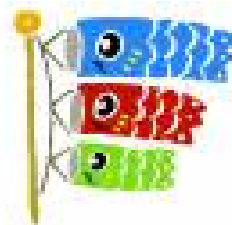


健康フラガ 平成25年5月号



医療法人将優会
クリニックうしたに
理事長・院長 牛谷義秀

ふうしん 風疹

子供のころ、風疹にかかったという人は多いのではないのでしょうか？今、全国で風疹が流行しており、春から初夏にかけて患者が増える感染症であるだけに、流行の拡大が懸念されます。風疹は37度台の発熱、発疹、耳や首筋のリンパ節の腫れなどの比較的軽い病気だと考えられがちですが、大人になってからかかると症状が重くなる傾向があり、悪化すると髄膜炎や脳炎を起こすこともあります。さらに厄介なのは、妊娠初期の女性が感染してしまうと、生まれてくる赤ちゃんに難聴や白内障、心疾患などの先天性風疹症候群のほか、精神・身体の発達が遅れるなど、重篤な悪影響を及ぼす可能性が高いことです。風疹は子供に多い病気として知られていますが、今回感染している患者の中心は成人男性です。しかしながら、家庭でも職場でも、周囲には妊娠・出産適齢期の女性がたくさんいらっしゃいます。妊娠中に風疹にかかると胎児に影響を与えてしまうので、「妊娠する前」の女性に対するワクチン対策がとても重要な病気です。

症状が出る期間は3日ほどと短く、また麻疹と似ているために「三日ばしか」と呼ばれる風疹ですが、かつて日本では昭和51年、昭和57年、昭和62年、平成4年に大きな流行がみられるなど、5～10年ごとに大流行がありました。平成17年以降は急速に患者が激減し、大流行もなくなっていました。平成24年に入って関西・首都圏中心に感染が拡大し、平成25年4月16日現在、東京都を中心に大流行している風疹は、すでに昨年の2,353名を上回り、全国で3,480名が感染、昨年の1.5倍の非常に早いペースで患者数が増えています。患者の7割以上は男性で、そのうち8割は20代～40代でした。今年、14週（4月第1週）までに発生した県内での累積報告数が9名となり、第14週に報告された3名はいずれも宮崎市保健所管内で発生しており、年齢別では20歳代・30歳代・40歳代がそれぞれ1名でした。そのうち2人はワクチンを接種していませんでした。

1. 原因と症状

風疹は風疹ウイルスの飛沫感染^{ひまつ}によってひきおこされる感染症です。初発症状は発疹^{ほっしん}で、初めは顔面に現れ、すみやかに全身に広がります。皮がむけたり色素沈着を残したりすることはなく、通常3〜5日で消えます。感染可能期間は潜伏期の後半から、発疹出現後5〜7日間とされています。桃紅色の

小さな斑状丘疹^{はんじょうきゅうしん}が特徴的で融合することは少なく、また熱も高熱は見られず、2〜3日で解熱します。風疹の好発年齢は5〜15歳で子供の病気と考えられがちですが、子供の頃、予防接種を受けていなかった年代が成人した時の発症が増えてきました。また、一度かかれば、自然に終生免疫（一度かかったら、免疫を獲得して二度とかからない）が続くと考えられていましたが、再感染の報告も見られ、また感染しても発病しない不顕性感染^{ふけんせい}（発疹などが出現しない）の割合も高くなったと報告されています。



【風疹で見られる発疹】
顔面に始まり、体幹
・四肢へと広がる

1) 症状の現れ方

発疹、リンパ節腫脹^{しゅちやう}、発熱を3つの主な症状とする急性のウイルス性疾患で、潜伏期間（病原体に感染してから身体に症状が出るまでの期間であり、その人の免疫力によって大きく左右されます）は14〜21日です。発疹と同時、または発疹の前から耳介後部や首のリンパ節が腫れ、発疹が消えてからも数週間にわたって続くことがあります。赤くて細かいのが特徴の発疹は顔を中心に始まり、そのあとすぐに全身に広がりますが、融合の傾向は少なく、色素沈着や落屑^{らくせつ}（皮膚の表層がはげ落ちたもの）を伴いません。軽い発熱、倦怠感^{けんたいかん}などの症状が出ます。3日目がピークで、その後徐々に回復していくため、「3日ばしか」と呼ばれることもあります。

2) 「先天性風疹症候群（congenital rubella syndrome）」とは

1941年にグレッグ氏によって、「新生児に白内障や心臓奇形が発生した」と初めて先天性風疹症候群が報告されました。そのほかに、緑内障などの眼症状、難聴などを引き起こすことも知られています。

国立感染症研究所によれば、平成11年〜平成25年の間に先天性風疹症候群患者25名の報告があり、宮崎では平成13年に1例報告（感染症発生動向調査平成25年1月30日現在）されています。妊娠10週までに妊婦が風疹ウイルスに初感染すると、90%の胎児にさまざまな影響を及ぼすことが知られています。先天性風疹症候群の典型的な三大症状は、心臓奇形・難聴・白内障です。妊娠11週〜16週までの感染では10〜20%に発生し、妊娠20週以降の感染で発生

することはまれとされています。

成人の場合は、発疹は出現しないで、風邪症状だけが終わるために風疹にかかったと気づかないこともあり、感染しても無症状のまま経過する場合があります。妊婦さんが妊娠初期に風疹にかかると、母親が無症状であっても生まれてくる赤ちゃんに先天性風疹症候群が発生する危険があります。また、そのほかに関節炎や脳炎（1人/4,000人～6,000人）、血小板減少性紫斑病（1人/3,000人～5,000人）を合併し、まれに重篤な状態に陥ることがあります。

3) 感染経路

感染経路は風疹ウイルスに感染した人の鼻や喉の分泌液に含まれる風疹ウイルスの飛沫感染、または直接接触感染によると考えられています。飛沫感染とは、感染した人のせきやくしゃみなどで空気中に出たウイルスによる感染のことです。したがって、日頃から手洗いやうがいを習慣づけることが大切となります。もしも風疹にかかってしまった場合には、せきやくしゃみなどで簡単に他の人にうつしてしまうので、治るまでなるべく自宅で休養するようにしたいものです。

2. 検査と診断方法

地域での流行や臨床症状、経過などを考慮して診断します。しかし、確定診断には急性期と回復期の2回にわたる血液検査（ペア血清）で風疹HI抗体価（風疹にかかったことがあればずっと持ち続ける抗体）の測定を行い、回復期のHI抗体価が急性期の4倍以上に上昇していれば、風疹にかかっていたと判断します。HI抗体価は感染直後とても高い数値になりますが、このHI抗体価だけでは、過去に感染したのか、妊娠してからの感染なのかわからないことがあります。その場合、風疹特異的IgM抗体というものを測定します。発疹出現から28日以内の血液中風疹IgM特異抗体の検出が確定診断になります。HI抗体とIgM抗体の両方が高い数値だと、妊娠中の風疹感染の可能性が高いということになります。風疹の抗体価（HI抗体価）は8未満を最低数値として、8、16、32…のように、8の倍数で示されますが、その標準は8倍以上、256倍以下というのが正常です。8倍以下では、風疹抗体は持っていないと判断され、風疹に感染する可能性があります。また256倍以上では極く最近、風疹に感染した可能性があります。

妊娠していることが分かった時期に風疹の感染が疑われる場合は、お腹の赤ちゃんに影響があるかどうかを判断するために、IgM抗体を検査するか、または期間をおいてHI抗体価を再検査するなどの方法をとります。予防接種をしても数年以上経過すると、予防接種で得られた抗体が消失してしまうことがあり、妊娠する時点で抗体を持っているとは限らないので、「妊娠をする前に」風疹の抗体があるかどうか、血液検査で調べておくことがとても重要です。

3. 治療方法

病院で風疹にかかったかどうかの検査をして、あとは対症療法が中心となります。対症療法とは、例えば、風邪をひいた場合、発熱があれば解熱薬、咳があれば鎮咳薬、咽頭痛があれば鎮痛

薬などを使って、症状を和らげます。同じように、風疹には風疹ウイルスそのものに効く薬や注射はないので、病気そのものの治療は行わず、病気によって現れる発疹や発熱、リンパ節の腫れ、などの症状に対しての治療が中心となります。

4. 予防方法

風疹を予防するには、やはりワクチンの予防接種が一番です。日本では昔、MMR（麻疹、おたふくかぜ、風疹）三種混合ワクチンが使われていましたが、現在ではMMRは使われておらず、MR（麻疹、風疹）二種混合ワクチンが使われることが多くなりました。MRワクチンとして、第1期（1歳児：生後12～24か月に至るまでの間にある者）と第2期（小学校入学前年度の1年間にあたる幼児：5歳以上7歳未満で、いわゆる幼稚園等の年長児）に計2回、できるだけ早期に接種します。平成6年以前は、中学生の女子のみが風疹ワクチン接種の対象でしたが、平成6年に予防接種法が改正されて以来、男女ともに対象となりました。しかしながら、平成6年以前に中学生だった現在の30～40歳代の男性はワクチンを受ける機会が少なかったため、全国的な流行の標的となって風疹にかかりやすいと考えられており、事態を重く見た厚労省は妊娠前の女性や妊娠中の女性を中心に、成人男性に加えて風疹注意報を発令しています。

さて一般に、子供の時に風疹にかかった場合より、大人になってからかかると症状が重くなる傾向があります。特に妊娠初期に妊婦が感染すると、難聴などの先天異常の子どもが生まれるので注意が必要です。風疹ワクチンは風疹の罹患や流行防止を目的としていますが、妊婦が先天性風疹症候群の子を産まないようにすることを最大目標にしています。妊婦が風疹ワクチンの接種を受けてはならないことはいうまでもありませんが、成人女性が風疹ワクチンの接種を受ける場合には、接種後2～3カ月間は確実に避妊することも大切です。

最初に血液検査をして、風疹の抗体があるかどうかを調べてから予防接種をするのが普通です。しかし、抗体がある人に予防接種をしても特に害はありませんので、人によっては、血液検査をせずに予防接種をする場合もあります。以前に予防接種を受けていても、抗体価が年月を経て徐々に下がってしまっている方もいらっしゃるからです。

5. まとめ

妊娠中の風疹感染は、妊婦さんはもとより、お腹の赤ちゃんにとっても大きな問題です。このような悩みに関わらないですむために、妊娠する前の予防接種がきわめて重要です。今後、妊娠を希望している女性は、きちんと早めに風疹の抗体価検査を受けて、免疫を獲得していなければ早めにワクチン接種を受けられることをおすすめします。ワクチン接種を受けていても、年月とともに抗体価が低下しているのに気づかず、また、さまざまな病気が原因で免疫が低下して、流行とともに再発することがあるので注意が必要です。